

新刊紹介

教行信證講讀 眞化の卷

金子 大榮著

『教行信證講讀』は、「教行の卷」を第一巻とし、「信證の卷」を第二巻として、茲に此の第三巻「眞化の卷」が刊行される事によつて完成したのである。

古來、『教行信證』は、淨土眞宗の根本聖典として、幾多先哲の研鑽を経たものであるが、其は、仰がんに愈々高遠、究めんに愈々幽邃なる『顯眞の書』として、我等の此の新しき世代の上に如何に領解さるべきであらうか。我等は今此の時代が持つ科學性と、豊富な思想と、廣範な思索とを使驅する事によりて、『教行信證』の持つ文化性の開顯を待つ事久しいものがある。其の意味に於て我等は、我等の世代が持つ『教行信證』觀の一つとして、此の著を得た事を喜ばねばならぬ。即ち、此の著は其の『序』に於て示さるゝが如く、著者が「七年間『教行信證』の解釋に専心傾倒せる記録の集輯である。」と共に、正しく「日本精神史上に於て『教行信證』の位置を見ねばならぬ」時代性を意識し、其の精神文化史上に於ける價值を問題として、師が専心「純熟せる時代の空氣を呼吸しつゝ此の『講讀』を記録」されしもの、た

る事を知る事に於て、我等は此の勞作の發表を多すると共に著者の熱意に學ぶべきものがあらう。まことに、師の内省の深さから來る獨自な思想體系と思索の妙味は、行文の流暢と相俟つて我等を益する所が多い。

『目次』を抄録すれば次の如し。

『眞佛土卷』目次、第一章、眞佛土、第二章、光明の諸徳、第三章、涅槃の意義、第四章、常樂の淨土、第五章、涅槃と佛性第六章、淨土の諸徳、第七章、本願酬報の意義、第八章、眞假の分別。

『化身土卷』目次、第一章、眞實と方便、第二章、來迎論、第三章、願生心の自己反省、第四章、定散の心と念佛の信、第五章、聖道より淨土へ、第六章、雜行雜修の分別、第七章、『阿彌陀經』の一心、第八章、果遂の誓、第九章、難信論、第十章、三願轉入の表白、第十一章、淨土教興起の時機、第十二章、『末法燈明記』、第十三章、眞偽の勘決、第十四章、天界と人生、第十五章、邪道雜記、第十六章、道教批判、第十七章、祠鬼神の非義、第十八章、眞宗興隆の事緣。

因みに、著者は今秋十數年ぶりに本學に復歸せられ、『教行信證』を講義されてゐる。(菊版、七六二頁、定價四圓八拾錢、濱市保土ヶ谷區神戸上町八三三金子大榮師著作刊行會發行)——長谷川。

内觀の法藏 (論集第四卷)

曾我 量 深著

著者は先に『救済と自證』(大正十一年)、『地上の救主』(大正十三年)、『傳承と已證』(昭和十三年)の三論集を刊行されたが、今此の『内觀の法藏』は、其の第四論集として刊行された。

師は其の序に於て、本論集の地位に言及し、『救済と自證』以後の文章を結集して、それが指示する自證の意義を深く本願の内觀に要求したる行跡を表明するものである。』と言はれてゐる。即ち、眞宗の他力救済の道が、遠く如來の本願の自證に裏附けられしものであることを指示せる『救済と自證』の後を受けて、本書に於ては著者は更に深く「宗教原理としての彌陀の本願」に想を潜め、其處に表現さるゝ、四十八願の開演に注意して、師の創見を發表しつつ、如來の願海に味到せんとするものである。従つて本書は、如來の自證境に直面せる著者の信經驗の表白である。茲に、我等は著者のたゆみなき思索の跡を知り得ると共に、本書が『内觀の法藏』と命名さるゝ所以をも知り得るであらう。

本書に輯むるところ、大正十一年より同十二年に亙つて發表されたる十一篇と、大正十四年に成る一篇と、大正十五年より昭和三年に亙つて成る八篇と、昭和九年福井縣下の夏季講習會に發表されたる末尾の一篇と、計二十一篇に亙る論文或は講話

記録の集成にして、其の間、専ら想を如來の願海に凝して、終始精神の苦闘を續けつゝ成れる、師の眞摯なる求道記録である事を知る。此れ一讀を獎むる所以である。

『目次』一、選擇批判の願心より廻向表現の願力へ、二、『觀經』の二の眼としての光臺現國と空中佛現、三、如來、我を救ふや、四、願心の自己莊嚴、五、命終を前念して、即生を後念す、六、自證の三願に就いて、七、彌陀と諸佛、八、『重誓の偈頌』に就いて、九、往相の理證と還相の教證、十、業惑の世界と法性の世界、十一、論議經としての四十八願、十二、宗教原理としての彌陀の本願、十三、本願の表現する四十八行、十四、如來の表現する自證の道程、十五、欲生心の象徵化、十六、有生・無生・得生、十七、宗教經驗と宗教原理、十八、眞宗の祈願十九、宗教原理の體驗としての大寂定、二十、宗教的要求の綜合的主體としての法藏菩薩、二十一、行信一體の實踐原理としての本願の内觀。

(菊判、四九一頁、定價四圓五拾錢、京都市下珠數屋町丁子屋書店發行)——長谷川。

大谷大學西尾教授編

藏梵 對照 翻譯 名義大集西藏語索引

樺博士の永年の苦心校訂の結果大正五年出版に成る翻譯名義大集は學界に大いなる足跡を印し、梵藏語に依る佛教研究者に

一大福音を齎した。然るに博士の出版は此れに附するに梵語索引のみなり、爲に切角の大集も學的使用價值半減せられるの憾みあり、我々は西藏語に依る索引を待望するに久しいものがあった。所が大谷大學教授西尾京雄氏が、故寺本教授將來の北京版西藏藏經並に荻原博士の佛教辭典等を參照して藏語索引を作製せられ、一度昭和十一年に、プリントにて出版された。此の索引の爲、佛教原典並に藏語研究者が如何に喜びを以て迎へたかは親しく此の索引を手にしたもののゝみの味はつた所である。然かもこの少數出版は直ちに賣切れ、重寶なものを一度手にしたものが此れを失つた憾みは無きときよりも更に一層切實なるものがあつた。

幸にして今秋、前回の假綴本よりも更によりよき本の體裁を整えた出版が企てられ、物資不自由の折柄ながら、學徒の檢索に便ならしめん爲の留意が加へられ、用紙、印刷、製本共に、極めて優秀なる書物となつて發刊され、我々の手に入ることになりしは學界の爲實に慶ばしきことである。

現在の印度、西藏語研究の狀態並に戰時下の時勢にありては此の書の利用位が許さるゝ唯一の研究材料に非ずやと一入に感ずる。斯學に志す人々には贅言を要せざる本書なるも、爰に再び西尾教授の翻譯名義集西藏語索引を得て如何ばかりの有用と思半に過ぐる斯學研究への貢獻の第一歩を基礎付けるものと考へる。切に佛教原典並に梵藏研究者の友として是非一本を座右に具へらるゝことをお奨めするものである。(I)

(A列5號版上製本、定價金七圓、京都市下京區烏丸七條上

ル一生堂書店發行)

日本天台宗典目録

山口 光圓監修

日本佛教に於ける天台教學の地位や、研究に於ける目録の重要さ等を今更らしく述べる必要もないが、其教觀二門を中心に或は台密に戒律に念佛に摩訶止觀以外の禪法に、或は聲明業に山王神道にと複雑にして多岐なる其發展の跡は、まことに日本思想史上の偉觀であり、其研究方向の如何に拘らず、いやしくも日本佛教を考へんとするものゝ關心を、必ず一度はこゝに至らしめる所である。併し乍らこのことに當つて先づ如何なる人師あつて如何なる著作ありや、かゝる問題に對して如何なる書籍ありや等を單的に知る基礎的目録なく、勞して徒らに望洋の歎を感ぜしめるのが常であつた。然るに今年初、我等は澁谷亮泰氏に依つて天台書籍綜合目録(上卷のみ、下卷未刊)を惠まれ右の後者即ち問題別の目録を得て喜んだが、今回更に其前者即ち人師別のそれを得ることゝなつて、如上の歎を完全に解消することゝなつた。本書は日本天台に於ける上は傳教大師より下は現代の諸師までを含む一千二百餘名を五十音順に列ね、各師の下、其述作を大略成立年代順に配置されてある。一々の諸師にあつて其明かなるに従つて簡単に生歿年、房號、寺號、諱等を注記し、著述には卷缺、刊寫の別、藏所、收容叢書等が示さ

れ、佛書解説大辭典所收のものは其標旨がある。卷頭に人名索引があつて便益を感じるが、此上に収載書總索引を求めるのは五千部に餘る書名の占める頁數を思つて時局下望蜀の願とすべきであらうか。尙一千二百名五千部の其々に就き、二三議せらるべきものもあるが、かゝる編著に完全無缺を求むることそのこと自體が無理であり、多年の勞果を直に恵まれた學恩に對してかゝる貪婪は許さるべくもない。そして編者謙抑、稿本を提供するといひ、諸師各項の間に空白を置かれた周到さに對して、讀者各々相寄り其完成をはかるべきであらう。近時我國の思想界は、今日支配してゐる西洋哲學風な考へ方と嘗てそれを指導した佛教流の考へ方の接觸を漸く問題にし、近代に於ける「理性」から「實存」への轉回が、既に遠く中古日本天台の内部に於いて「理」より「事」へとより深刻なる形を以つて成就されてゐることを注意し始めた。日本の學としての天台教學が、こゝにひろき立場に於て、新たな脚光をあびて登場せんとする時本書は其よき指針となるであらうことを感ずるのである。

(比叡山專修院出版部發行、頒價參圓)(藤島)

法隆寺再建非再建論爭史

足立 康編

日本書紀天智天皇九年四月三十日條に、夜半之後、災法隆寺一屋無餘、大雨雷震、とあるが、明治二十年頃より此の記事を

廻つてその建立年代に關する論爭が始つて以來、今日に至る迄文獻學的、考古學的、美術、建築學的な凡ゆる角度よりその再建非再建の問題は續けられて來てゐるけれど、問題が日本藝術史上最古の地位を規定せんとするものであるだけに、今に至るも尙、眞摯な研究が續けられつゝあることは廣く周知の事柄である。本書は日本建築史の權威であり、新非再建論なる新説の立場に立つて學界に異常な緊張を與へられつゝある足立博士が過去五十餘年に亘つて續けられつゝあるこの論爭に参加した諸學者の論稿を歴史的に次第し、學術的な立場から論爭過程を三期に大別され沿革を編纂されたものである。概観すると、第一期は明治三十八年頃迄の文獻的立場に立たれる菅政友氏、黒川博士、小杉博士から喜田博士に至る再建と、塚田武馬氏、北畠治房男から、文獻及藝術の立場に立たれる平子鐸嶺氏、關野博士に至る非再建の論爭、第二期は昭和二年頃迄の再建派の斑鳩宮轉用説と非再建派の若草伽藍趾炎上説とも云ふべきものとの論爭、第三期は現今に至る迄の論爭で、兩論とも書紀焼失の記事を認め、それを若草伽藍趾の法隆寺とされるが、足立博士は法隆寺西北隅に創建された釋迦堂一廓後身説なる新非再建説をとられ、喜田博士は焼失後和銅年間の再建説をとられたのであつたが、本書はこゝ迄を以て終つてゐる。

以上の結論のために絶へざる諸角度からの研鑽が積まれ、喜田博士今はなき今日、尙多くの人人によつて深く研究が續けられつゝあるが、本書によつてこの史上の大論爭の背景を知ると共に、廣く眞摯な學問研究の深い靈感に觸れ得ることは、我々

にとつて非常な喜びを與へる所以でもあらう。

(昭和十六、十、龍吟社、三六八頁、價三・八〇)(K)

大和王寺文化史論

保井芳太郎編

王寺町(奈良縣北葛城郡)は地形的に大和平野の西北部に位し明神台地、馬見丘陵、信貴山塊等に圍まれた盆地(片岡地方)をなし、西に大和川溪谷を以て河内和泉に連絡する、大阪と奈良との通路として先史原史時代より夙に通過文化的な特色を以て發展を始め、久度神社等の獨特の信仰集團を形づくり、佛教渡來後にも頗繁な内外衆人の去來によつて、斑鳩寺院とは意味を異にした別個の因に基く數多の伽藍建築を有してゐる。

本書は大和史學研究の權威として通く知られてゐる保井芳太郎氏が、氏の生住の地王寺の郷土研究として、地理地質動植物等の自然科學的方面、先史歴史時代の美術考古、宗教經濟方面などの全領域に亘つて夫々大家の専門研究を蒐め編まれたものである。主に聚落單位よりなる原史時代の研究には夫々の單位ごとに着實な研究が行はねばならないが、古代史上特別な意味を持つ此の地方の研究のために、本書の如き緻密な研究の存することは誠に喜びにたへない。昭和十二年の刊行であるから新刊とはいへないけれど、今度本學圖書館に購入されたので、左に目次を記し今一度刮目することゝしてみた。

王寺町の地形(三村信男)、交通の町「王寺」の人文地理的考察(堀井甚一郎)、王寺と大和川及び葛下川(西田與四郎)、昔の龍田川と今の龍田川について(保井芳太郎)、近世に於ける大和川の舟運―特に魚梁船について―(肥後和男)、大和川龜瀬附近の地(帷子二郎)、大和川産魚族の研究(今西岩太郎)、大和の先史原史時代と王寺平野(樋口清之)、上代王寺盆地の佛教文化(田中重之)、王寺附近の條里(田中吉永)、王寺歌枕(岩城準太郎)、王寺出土の古瓦(木村捷三郎)、西安寺出土陶製骨壺について(角田文衛)、大和王寺町の金石文(高田十郎)、考靈天皇片岡馬阪陵(佐藤小吉)、久度神社祭神考(肥後和男)、久度神社の春日曼荼羅について(若井富藏)、片岡神社と八咫鳥(山本賢三)、達磨寺の研究(福山敏男)、達磨寺古墳群について(樋口清之)、達磨寺達磨像について(小島貞三)、達磨寺の聖德太子像について(若井富藏)、達磨寺佛涅槃圖について(保井芳太郎)、片岡王寺趾(石田茂作)、放光寺古今縁起の地理的及經濟的考察(西岡虎之助)、西安寺趾(石田茂作)、徳川時代に於ける王寺町の領主と石高について(田村吉永)、片岡八郎傳(中村直勝)。

附録。王寺町役場藏本放光寺古今縁起全。

(昭和十二、十二、大和史學會、菊版四五八頁、附録四八頁、價五・〇〇)(K)